

【研究ノート】

NHKアーカイブス保存映像の文化人類学的調査の可能性

宇仁義和

はじめに

本稿は、北海道民族学会 2013 年度第 2 回研究会 (2013 年 10 月 26 日・網走市) の口頭発表「NHK アーカイブスの保存映像に見るアイヌと樺太先住民、捕鯨」で取り上げた映像を紹介し、民族学的な調査の可能性について考察したものである。筆者は 2013 年 4 月から NHK アーカイブスが行なう公募研究に採択され、一般には非公開の映像を視聴する機会を得た。研究課題は「映像資料を利用した水族館展示と鯨類飼育の歴史研究」であり、視聴映像の大半は水族館の飼育技術や展示に関するものであったが、一部に捕鯨やイルカ漁業、アイヌに関するものを含んでいた。視聴した映像は、現在のところすべて非公開であり、閲覧するには NHK アーカイブの公募研究に採択される必要がある。

資料と方法

・NHKアーカイブスとは

NHK アーカイブスは、埼玉県川口市にある日本最大の映像アーカイブであり、科学館や映像博物館などの複合施設「スキップシティ」に位置している。ここには NHK 制作の番組やニュース、NHK が権利を買い取ったニュース映画、そして大型特集番組「日本 映像の 20 世紀」で収集されたさまざまな制作主体による映像が保存されている。その数はテレビ・ラジオ番組 647,000 本、ニュース映像 1,768,000 項目、ニュース原稿 1,042,000 本、番組の台本 38,000 冊などにのぼっている (NHK アーカイブス学術利用トライアル研究事務局「NHK アーカイブス学術利用トライアル研究 II・関西トライアル II パンフレット」http://www.nhk.or.jp/archives/academic/NHK_Archives.pdf)。アーカイブスの建物には「番組公開ライブラリー」があり、オンデマンド方式で公開番組の視聴が誰にでも可能となっている。しかし一般公開されている番組はほんの一部で、2014 年 1 月 31 日現在「番組公開ライブラリー」で視聴可能なのは 8,819 本と保存番組のわずか 1.3% に過ぎない (<http://www.nhk.or.jp/archives/library/>)。ウェブページでは、非公開の番組を含めた番組情報 (メタデータ) を得ることができるが、それでも制限が大きい。

非公開映像は同アーカイブによる公募研究「学術研究トライアル」に採択されることで視聴が可能となる。採択されると川口あるいは NHK 大阪放送局での視聴に限られるが、保存番組のほとんどを見ることができ、データベースへのアクセスも職員とおなじレベルで可能となる。「アイヌ」を検索して抽出される映像数は、公開番組では 13 件、インターネットの番組情報はニュース映像が検索されないが 164 件である。これに対し、部内データベースでは 3,797 件がヒットする (番組名、副題、内容を検索、期間は 1897 年-2013 年 6 月 18 日、2013 年 8 月 20 日検索)。ただし、犯罪など人権に関わる映像の一部は視聴が許されず、また 1999-2000 年にかけて放送された「日本 映像の 20 世紀」で収集したような NHK 以外の手による映像、NHK アーカイブでは「外部制作」と表示、は利用に制限があり、基本的に論文などでの公表や言及はできない。

なお、公募研究に採択されても、映像の保存や複製はいっさい禁止されている。次善の策として事務局に依頼してキャプチャ画像を得ることができるが、1研究あたり20-30枚に制限されている。

・視聴方法

本稿で紹介する映像の視聴は、埼玉県川口市のNHKアーカイブスに出掛け、ひとりで行なった。視聴映像の記録は、タイムスタンプを記録しつつ動画の内容や登場人物の発話やナレーションの内容を記載したほか、戦後間もない時期のニュース映画については、ナレーションの全文を文字に書き起こした。視聴した日付は2013年4月12・15日、5月17・20・24・27日、6月21日、8月20日の計8日間である。

・紹介する映像

本稿で紹介するNHKアーカイブスの映像は、網走での口頭発表で取り上げた9本に瀬戸内海のシャチ捕獲の2本をあわせた11本である。これにNHKアーカイブスの保存映像ではないが樺太先住民の姿を一部記録した「産業の樺太」を加え、合計12本を紹介する。以下に番組名と副題、放送年月日を説明順に記す。テレビ放送開始以前の「日本ニュース戦後編」は映画館での上映開始に関係した日付と思われる。

1. NHKニュース「アイヌのくじら祭り」1956年4月5日
2. NHKニュース「アイヌのトッカーリ狩り」1956年5月6日
3. 日本ニュース戦後編第121号「流氷にアザラシを追う」1948年5月4日
4. 日本ニュース戦後編第291号昭和26年「ごんどう鯨の生捕り」1951年7月31日
5. NHK週間ニュース「鯨の群れを生捕り」1957年8月16日
6. ある人生「鯨博士」1965年5月23日
7. 新日本紀行「いるか漁民～伊豆半島・川奈」1971年12月6日
8. 新日本紀行「夏鯨漁～金華山沖～」1969年8月11日
9. にっぽん列島朝いちばん「追いつめられた沿岸捕鯨 和歌山県太地町」1987年9月30日
10. NHK週間ニュース「巡視船で鯨退治（瀬戸内海）」1957年4月12日
11. NHKニュース「海のギャング／シャチ退治 瀬戸内海」1957年4月19日
12. 「産業の樺太」1934年制作公開 全国樺太連盟所蔵

以下、映像をグループ分けして紹介する。

映像の説明

ここからは視聴映像の個別説明である。記載事項は、番組名と副題、放送年月日、映像継続時間、色数、音声の状況、撮影地、そして具体的な説明とする。

○アイヌとアザラシ猟に関する映像

視聴した映像のうち副題にアイヌの語が含まれていたのは2本であった。このほか北海道に関連した資料に、本州企業の操業によるアザラシ猟業の映像が1本あった。

1. NHKニュース「アイヌのくじら祭り」

1956年4月5日放送、7分05秒、モノクロ、音声：なし、撮影地：八雲町付近？

番組名は「NHKニュース」となっているが、編集された映像ではなく、ニュース用に撮

影された未編集の素材映像集と想像される。映像の内容は、海岸の茅葺き屋根の小屋での準備の様子、砂丘の祭壇での祈りと踊りの部分、砂利浜の波打ち際に置かれた丸木舟に乗って銚を投げる様子や丸木舟を海に浮かべるシーンからなっている（写真1）。砂浜の祭壇にはカマイルカやミンククジラと思われる椎骨や肋骨が積み重ねられていた。登場人物は祭司役の男性2人、踊り手の女性8人であり、このほかに見物人が子どもと大人あわせて8人程度が映っている。銚を投げようとする様子が複数回現れるなど、カメラの注文に応じてポーズをとる様子が記録されていた。写真1の銚を持つ男性は、札幌大学の田村将人准教授によれば椎久年蔵（しいく・としぞう）氏ということである。このことから撮影地は八雲町周辺と推定した。本稿に掲載した写真は映像のキャプチャ画像では不鮮明に見えるが、実際の映像はより条件がよく、踊り手などの人物の特定も可能と思われる。

2. NHK ニュース「アイヌのトッカリ狩り」

1956年5月6日放送、5分42秒、モノクロ、音声：なし、撮影地：斜里町峰浜付近

これも1と同様に素材映像集のようである。映像中の船や流氷の様子、人物の姿は『アイヌ民族誌』口絵写真「66 流氷の中に舟を漕ぎ出し、キテ（銚）であざらしをとる」および「65 流氷の上に憩うトッカリ（あざらし）」と同一に見え、同書の写真はこのときに撮影されたものと考えられる。『アイヌ民族誌』の写真では、画角や大きさから人物の特定が困難だが、この映像では銚を持つ人物の正面アップの映像が写っており、「斜里アイヌ」（更科1955）での聞き取り対象者だったことが明らかである。船の上でちいさなイナウを作り海に流す様子も映されていた。

アイヌのアザラシ猟については、NHK制作の「ユーカラの世界（第1話）」（1963）で再現映像が作られている。これを完成形とした場合、アイヌのアザラシ猟の復元は、更科源蔵などによる聞き取り、それを元にした『斜里町史』でのイラスト付き解説（更科1955）を経て、本稿で報告したNHKのニュースの撮影で船上でのイナウ作りと銚の構えが実演され（船は漁船を使用）、最終的に「ユーカラの世界」でイタオマチブを用いた猟の様子が復元されたという経過であったと考えられる。

3. 日本ニュース戦後編第121号「流氷にアザラシを追う」

1948年5月4日、1分05秒、モノクロ、音声：ナレーションと効果音のみ・同録音声なし、撮影地：紋別沖？

戦後間もないオホーツク海でのアザラシ猟業に関する映像である。ナレーションは「北海道網走を出て5日目にやっと日本海獣会社の一行はアザラシを見つけました。ここは日本が漁業を許されている一番北の端です」というものであるが、背景に山並みが写っていることから「一番北の端」は大枠での意味だろう（写真2）。ほぼ1分間の映像であるが、アザラシ猟業の映像、とりわけ日本海獣株式会社に関係した映像としてたいへん貴重なものである。日本海獣は戦時中に設立された国策会社で、その後継会社が日魯毛皮株式会社である。日魯毛皮が始めたアザラシ毛皮製品は1970-1980年代には北海道を代表するみやげ品となった（宇仁2009）。オホーツク海のアザラシ猟業の映像は、ほかには専業猟業終末期の1977年、ソビエト200海里内で操業する紋別市の渋田海獣のドキュメンタリー「200カイリの彼方に」（北海道テレビ放送）が知られる程度である（宇仁2009：71）。

○小型鯨類の追い込み漁

IWCの管轄外である小型鯨類の追い込み漁に関する映像を4本視聴した。和歌山県太地町で収録されたコビレゴンドウの追い込み漁に関する映像が2本、静岡県下田市川奈が舞台のスジイルカを主体とするイルカ追い込み漁に関するものが2本である。太地ではゴンドウクジラの追い込み漁を古くから行っていたとされるが、その様子を詳しく伝える報告は知られていない。伊豆のイルカ漁業は民俗学からの報告があるが(福木1997)、NHKアーカイブの同時録音音声付きの映像は、漁労活動を動画で伝えるもので、より詳しい内容の検討が可能である。

4. 日本ニュース戦後編第291号昭和26年「ごんどう鯨の生捕り」

1951年7月31日放送、0分37秒、音声：ナレーションと効果音のみ・同時録音なし、撮影地：和歌山県太地町

この映像は短いながらも1951年と年代を特定して、太地のゴンドウクジラの追い込み漁の様子を記録したものである。わずか40秒足らずの映像には、港内の鯨を木造漁船や歩いて追い込む大人のほか、十数名の子どもたちが横一列になって泳いで追いかける姿、たらいのような小型の船に子ども1-2名が乗り込み手の平で水をかいて追いかける様子(写真3)、追い込んだイルカを波打ち際で網を用い捕らえるふんどし姿の男性など(写真4)、地域総出で追い込み漁が行われた様子が記録されていた。子どもを交えた漁の様子は、太地にとって鯨漁が地域のよりどころであったことを感じさせる。

一方、ナレーションは「紀伊半島南端和歌山県太地港では7月20日、折から押し寄せたゴンドウクジラを港に追い込んで40頭全部を生け捕りました。長さ3メートル重さ百貫のちいさい鯨です。この鯨1頭が1万5-6千円、締めて64万円が一時に転げ見込み、港は子どもたちまで総出の、時ならぬ鯨利益でした」というものである。漁労の様子には詳しく触れておらず、現金収入に沸く辺地の漁村という視点で描写されていた。仮にナレーションの文章が全文翻刻されたとしても、映像の中身はわからないだろう。むしろナレーションは映像を補完する別の内容を含むものとして作成されていたのかも知れず、映像資料は直接視聴することが大切なことがわかる。

5. NHK 週間ニュース「鯨の群れを生捕り」

1957年8月16日放送、0分51秒、モノクロ、音声：ナレーションと効果音のみ・同時録音なし、撮影地：和歌山県太地町

先の映像の6年後のもの。太地港を泳いで見物する子どもや旅客を満載して見物中の遊覧船が映っている。ナレーションは「和歌山県東牟婁郡太地町(だいじちょう)の沖合で捕鯨船がゴンドウクジラの群れを見つけ、港に追い込んで生け捕りにしました。みんなで35頭、1頭平均で2万円としてもざっと70万円が転げ込んだと地元ではほくほく顔です。遠くからめずらしそうに眺める大人の見物を尻目に、元気な子どもたちは泳いで行って鯨見物。しまいには遊覧船まで繰り出すという時ならぬ鯨の大漁によるこぶ港の賑わいでした」というもので、漁労の様子は一部伝えられるものの、1951年の映像と同様、おもな内容は換金商品である鯨で賑わう漁村というものであった。太地では1950年代後半でも鯨漁には子どもの参加があったことがわかる。

6. ある人生「鯨博士」

1965年5月23日放送、29分30秒、モノクロ、音声：あり、撮影地：神奈川県藤沢市および静岡県伊東市川奈ほか

日本で初めて水族館のイルカ研究で博士号を得た中島将行氏のドキュメンタリー。おもな撮影場所は神奈川県藤沢市の江の島マリランド（現・新江ノ島水族館）でのイルカ飼育の様子やイルカ運送であるが、次いで静岡県伊東市川奈の漁港や沖合でのイルカ追い込み漁が現地ロケで、さらに回想シーンとしてイルカ突棒漁業の様子が収録されている。番組内の映像ではイルカ漁の具体的な撮影地に関しての言及はないが、同時代の映像である追い込み漁については、漁港から見える岩の形状から川奈と判断した。追い込み漁に関しては、船団を組んだ漁船が竿を水面に叩きつけるなどしてイルカを漁港に追い込む様子のほか（写真5）、入り江に追い込まれたイルカがパニック状態になり海岸に乗り上げる姿などが記録されていた。なお、この番組は子ども向けの書籍が刊行されている（神戸1966）。

7. 新日本紀行「いるか漁民～伊豆半島・川奈」1972/12/6

1971年12月6日放送、28分30秒、カラー、音声：あり、撮影地：静岡県伊東市川奈ほか

イルカ漁業を題材にした番組で、追い込み漁の様子が詳しい。出漁にあたっては漁協のスピーカーから軍艦マーチが流れ、それを合図に漁民が集結出港する様子を写している。映像に映る川奈のイルカ漁は、沖合でイルカの群れを見つけ漁船で湾内に追い込むもので（写真6）、1972年時点では漁労活動への参加は成人男性からなる職業漁民のみであったことがわかる。データベースによると、川奈のイルカ漁業の映像は1957年以降毎年のように制作されている。加えて九州や沖縄のイルカ漁の映像も保存されており、NHK アーカイブスの映像群を用いたイルカ漁業研究が可能と思われる。

○捕鯨

捕鯨の映像は、商業捕鯨が盛んな1960年代のものと、商業捕鯨モラトリウムを受け入れた1987年頃のをいくつか視聴した。加えて現在では見られない鯨類の駆除の映像を含め、時代の特徴が現れていると判断した映像4本を紹介する。

8. 新日本紀行「夏鯨漁～金華山沖～」

1969年8月11日放送、28分50秒、カラー、音声：あり、撮影地：宮城県石巻市鮎川、月の浦、石巻市街

大型沿岸捕鯨最盛期の番組。ナレーションは「宮城県牡鹿半島金華山沖370キロ。ここでは人と鯨の戦いの毎日が繰り返されているのです」と捕鯨を人と鯨との戦いに見立て、「砲手を夢見て11年、〇〇さんは自らの手で見事に一番銛を打ち込みました」と鯨を獲物として描くなど、環境運動以前の価値観が前面に現れていた。急峻な斜面でわずかな畑を耕す老婆の姿に続き「牡鹿半島に住む人びとにとっては海がすべてです」というナレーションを流すことで、鮎川が捕鯨に向かった理由を説明していた。映像では、船から銛が飛び水柱が立ったあと左背に銛を刺した鯨が泳ぐシーン、銛を打つ場面が続いて命中した鯨から血が出る場面、そして砲手たちの得意げな顔へのつなぎなど、鯨への人道的配慮が求められる現在からすれば違和感のある絵づくりとなっていた。

この番組には捕鯨の漁労の様子に加え、鯨工芸品、支倉常長ゆかりの地、えびす子の披露宴そしてメロウド漁というイカナゴを獲る地域の伝統漁法の様子も収録されている。メロウド漁は、ウミネコとウトウの2種の海鳥の力を借りて行なうめずらしい漁法として2分間にわたり描かれていた。漁は海鳥がメロウドの群れを見つけることに始まり、海鳥に追われたメロウドがパニック状態になることが利用されている。この漁法については番組タイトルには含まれておらず、実際に映像を見るまでこの漁法が記録されていることはわからなかった。

9. につぼん列島朝いちばん「追いつめられた沿岸捕鯨 和歌山県太地町」

1987年9月30日放送、カラー、音声：あり、撮影地：和歌山県太地町および北海道釧路市

日本が商業捕鯨モラトリアム受け入れる直前の番組。グローバル化に翻弄される地方の生業という視点で描いたルポルタージュで、グローバル化という言葉がなかった時代にその影響を的確に伝え、モラトリアム受容が地域に与える影響、そして住民の気持ちを当事者の言葉によって綴っている。現在に続く捕鯨問題の論点をうまくまとめていると考えたので、若干長くなるが出演者のコメントを中心に評論を加えながら述べる。コメントは繰り返しや感嘆詞など一部を略した。

＜グローバル化を的確に表現＞番組の冒頭でのスタジオ進行役が「日本が国際化していくに連れて国内のいろいろな産業が国際経済や国際関係といったおっきな波のなかに組み込まれているわけですが、それは大きな企業だけではなくて、町や村で生活に密着したなかで育ってきた企業産業でもおなじことがいえるわけです」とグローバル化による変化を的確に説明する。

＜捕鯨禁止の歴史を端的にまとめる＞担当ディレクターの最初の説明が「1970年代に入って捕鯨に反対する声アメリカをはじめ世界で急速に高まりました。自然保護の立場から鯨の捕鯨をやめるべきだというのが反捕鯨の人たちの見方です。1982年、国際捕鯨委員会、IWCが商業捕鯨の全面的禁止を決議しました。さらにアメリカは捕鯨を続ける国に対して、アメリカ200海里内での漁獲を禁止するという法律を制定しました。こういう動きのなかで日本がおもに捕っているミンクジラの資源は減っていないという調査結果も出ていますが、こうした反捕鯨の国際的な情勢のなかでは日本政府は商業捕鯨の停止を表明せざるを得ませんでした。そしてこの4月、南氷洋捕鯨はその50年の歴史を閉じました」と商業捕鯨が追い込まれていく過程を簡潔に解説した。

＜地元まとめ役の言説＞地元の捕鯨全面禁止反対連絡協議会会長がインタビューされ「非常にこう、なんと申しますかもどかしいわけですね。私たちの気持ち私たちの生活、私たちの持つ郷土、文化そういったことと関わりなく、大きなこの世界の流れのなかでこういう問題が決められてしまう。私たちはどうしようもないというもどかしさはあるんですけども、そこで止まっていたはどうにもなりませんから、一歩でもやはりそれを踏み越えて、捕鯨存続のためには努力しなければならない」とグローバル化の波に翻弄される地域を簡潔に表現していた。

＜砲手の言説＞南氷洋砲手が南氷洋での調査捕鯨を巡る日米捕鯨交渉のニュースを見て「今日も非常に期待してまあ見たたんですけどね、残念ながらいろんな形で報道されてた

んでね、非常に腹の中むしゃくしゃしてます。今こう、町の中で捕鯨に、捕鯨の占めるその経済的な役割というものがね、これ決して高いものじゃありませんけどね。ですけどもなぜ太地の町が、町をあげて一眼となって捕鯨存続を訴えるかということはね、やはりそのずっとまあ400年も前から続いてきた先祖から受け継いできた伝統、そして歴史ね、そしてこの町にはいっぱい鯨にまつわる文化というものがありますね。そういうものがあるってこそ今の太地町なんで。ですから太地の人っていうのは、鯨は単に経済的なものじゃなくてね、太地の町の心のよりどころとしての鯨なんです」と地元住民の気持ちをストレートに言い表していた。この砲手の発言は、本稿で紹介した、日本ニュース戦後編第291号昭和26年「ごんどう鯨の生捕り」やNHK週間ニュース「鯨の群れを生捕り」を見るとより納得できると感じられる。

＜グローバル化と地域についての総括＞担当ディレクターのまとめは「そうなんです。私、今回の取材で鯨に関わっているいろんな方にお会いしたんですけど、みなさん口をそろえておっしゃるのが、自分たちの生活なんだ自分たちの仕事なんだと、それが自分たちの手の届かないところで決まってしまう決定されてしまう、そのことに対するこう非常なあきらめというかもどかしさというか、そういうものを感じました」というものであった。グローバルな取り決めが地方を疎外すること、疎外された当事者のおかれた状況と心象を的確に表現したといえるだろう。今日では一般的に認められる表現に思えるが、1987年当時としては最先端の印象記だったのかも知れない。

10. NHK 週間ニュース「巡視船で鯨退治（瀬戸内海）」

1957年4月12日、1分30秒、モノクロ、音声：ナレーションと効果音のみ・同録音声なし、撮影地：おそらく兵庫県沖の瀬戸内海

映像の内容は次のナレーションのとおりである「2月頃から2頭の鯨が瀬戸内海に入り込み、盛んに漁場を荒らしますので、このほど神戸の海上保安部の巡視船「あおさぎ」が機雷を処理する機銃を持ち出して鯨退治に乗り出しました。説明書を紐解いてまずは撃ち方の研究です。こうするうちに待望の鯨を発見し、早速射撃開始です（効果音として機銃の音が挿入される、写真7）。しかし鯨の装甲は7.7ミリの機銃弾を受け付けず、已然さるも海も、のたりのたりと散歩です。ここと思えばまたあちら、海上にむなしく機銃の音を響かせて2時間半にわたる攻撃もいっこうに相手にされず、帰りは碁や将棋で鬱憤を晴らすという鯨退治的一幕でした」。映像には実際にシャチに向けて機銃が発砲される様子が記録されている。捕獲に失敗した作戦は次の11の映像のとおり継続された。

11. NHK ニュース「海のギャング／シャチ退治 瀬戸内海」

1957年4月19日、4分08秒、モノクロ、音声：ナレーションと効果音のみ・同録音声なし、撮影地：兵庫県沖の瀬戸内海

シャチに対する当時の認識をナレーションが表していた。「漁場を荒らし回る海のギャングシャチが春の瀬戸内海に侵入したため、播磨灘一帯に捕り物陣を敷くことになり巡視船や捕鯨船が神戸港にものものしく集結して出航前の準備です」「シャチはオスメスの2頭で、このままにしておくると沿岸漁場のたいせつな網を破られるというので、どうしても退治することになりました」という。10の映像で見た巡視船では捕獲できなかったため、小型捕

鯨船の応援を頼んでの捕獲事業であった(写真 8)。WK2-202 という船体番号から小型捕鯨船は和歌山県太地町のもので推定される。映像には2頭のシャチのうち、オスを捕獲し陸揚げするところまでが収録されている。ナレーションによると神戸港に陸揚げ、体長 9m という。神戸市立須磨海浜水族園に展示されている体長 7.9m のオスの全身骨格標本は、1957 年 4 月 17 日に捕獲されたとする横飛びするシャチの写真と説明が添付されており、この映像の個体と考えられる。

○樺太先住民の映像

12. 産業の樺太

1934 年公開、約 51 分、モノクロ、音声：あり（一部同録音声）、撮影地：樺太

これは NHK アーカイブスの映像ではなく、樺太庁の制作、横浜シネマ商会の撮影録音によるトーキー映画で一部に同時録音音声が含まれている。全国樺太連盟（樺連）が動画共有サイト YouTube に投稿した映像を視聴したものが公開されている (<http://www.youtube.com/channel/UC5zm4mbScW8hFHKkFlxGTog?feature=watch>)。この映画の特徴はこの時代に珍しい同時録音音声収録されていることである。雪山を登る蒸気機関車が牽引する貨車と客車の混合列車、針葉樹の伐採作業、鉄砲流しの様子などは現地の同録音声が収録されており、迫力が感じられる貴重な映像である。樺太先住民の姿は YouTube に掲載された動画「産業の樺太 1/6」にあり、トナカイが行き交う夏のオタスの杜、ポロナイ川を手漕ぎ船で横断する少女の姿が映されている (http://www.youtube.com/watch?v=SGhbq_AjfUY 13:02 から)。樺太先住民の写真や絵はがきは半澤写真館の作品などで知られているが(宇仁 1999)、動く映像はきわめてめずらしい。

おわりに：文化人類学的研究の可能性

NHK アーカイブでは、明治大正期を含む多数の映像を 1 か所でまとめて視聴することが可能であり、加えて保存映像のメタデータが充実していることが大きな特長である。これまでの採択課題を見るとメディア研究や表象研究が多い(NHK アーカイブス | 学術研究トライアル II | これまでの審査結果 <http://www.nhk.or.jp/archives/academic/result/result1-1.html>)。アイヌをテーマにした課題も同様である(崔 2011、2012)。しかしながら、保存映像は放送年月日が記録されており、制作年もほぼ特定可能で、また戦後間もないニュース映画や 1960 年頃以降のテレビ映像には音声も収録されており、メディア表象研究以外にも歴史資料として利用できると考える。

映像そのものも、たとえばアイヌの祭りや生業の技術などは、たとえ再現映像であっても伝承者のわざを記録している。繰り返し取り上げられた伊豆や太地の追い込み漁では、漁法や価格の経年的な変化を追跡することもできそうである。捕鯨のように大きく立場や価値観が変化した事象についても、言説の変容や初出について、NHK の映像に限定されるが検証することもできるだろう。さらに映像の特性を活かし、話者のインタビュアーに対する態度などを含めて観察が可能である。これは活字になった報告では得られない付帯情報であり、当時の様子を知り得ない若い研究者にとっては貴重な研究素材と考える。以上のことから、NHK アーカイブスの映像資料は、映像表現や表象研究などのいわゆるメディア研究だけでなく、歴史資料や文化人類学の素材としても利用可能といえる。とくにアイ

ヌの映像に関しては、今後整備される象徴空間の展示でも活用できるのではないだろうか。

課題としては、映像の利用制限がある。著作権や肖像権の保護、あるいは映像の所有者である NHK の権利保全もあってか動画の複製ができない。静止画のキャプチャも 1 研究課題あたり 20-30 枚に制限されている。さらに「日本 映像の 20 世紀」などで収集された「外部制作」映像は、論文への引用などオープンな形での利用ができない。公共アーカイブの使命、映像アーカイブを用いた研究の進展のため、著作権が消滅した作品については、作品の所有者との協議や肖像権を含む人権に配慮したうえで、映像が利用できるようにしてほしいと切に願う。今後はこの点を含め、より積極的な研究コミュニティとの関わりが作られていくことを期待したい。

謝辞

本論を作成するにあたり NHK アーカイブス、同アーカイブスの阿部靖彦氏と豊島圭子氏にたいへんお世話になりました。心よりお礼申し上げます。また 2 名の査読者の方々にも未熟な原稿に対し、親切なご指摘をいただきました。ありがとうございました。なお、本稿の一部は科学研究費補助金「もうひとつの近代鯨類学「第一鯨学」の形成と展開」（基盤研究 C 2011-2013 代表研究者：宇仁義和）の補助を得て行ないました。

引用文献

アイヌ文化保存対策協議会編

1969 『アイヌ民族誌』, 第一法規

宇仁義和

1999 「樺太敷香の写真家・半澤中の生涯と作品リスト」『知床博物館研究報告』 20 : 61-84

2009 「第 2 次世界大戦後の日本におけるアザラシ産業」『BIOSTORY』 11 : 68-80

神戸淳吉

1966 「クジラ博士」『ジュニア版 NHK ある人生 2』 pp.5-39+口絵, 岩崎書店

更科源蔵

1955 「斜里アイヌ」『斜里町史』 pp.169-230, 斜里町

崔銀姫

2011 「アイヌ表象と他者性の問題をめぐって：1950 年代のテレビドキュメンタリーを中心に」『佛教大学社会学部論集』 53 : 1-18

崔銀姫

2012 「「観光アイヌ」とは何か—まなざしの歴史的な変容をめぐって」『社会情報学』 1(2) : 93-108

福木洋一

1997 「川奈とイルカ漁」『日本民俗文化資料集成第十八巻 鯨・イルカの民俗』 pp.169-230, 三一書房（初出不明）

（うに・よしかず／東京農業大学 博物館情報学研究室）



写真1. NHK ニュース「アイヌのくじら祭り」
1956年4月5日放送



写真2. 日本ニュース戦後編第121号
「流氷にアザラシを追う」 1948年5月6日



写真3. 日本ニュース戦後編第291号 昭和26年
「ごんどう鯨の生捕り」 1951年7月31日



写真4. 日本ニュース戦後編第291号 昭和26年
「ごんどう鯨の生捕り」 1951年7月31日



写真5. ある人生「鯨博士」 1965年5月23日



写真6. 新日本紀行「いるか漁民～伊豆半島・川奈」
1972年12月6日



写真7. NHK 週間ニュース「巡視船で鯨退治（瀬戸内海）」
1957年4月12日



写真8. NHK ニュース「海のギャングノシヤチ退治
瀬戸内海」 1957年4月19日